

呼吸器内科

■ スタッフ

科長	小林 哲
副科長	藤本 源

医師数	常 勤	8 名
	併 任	1 名
	非常勤	0 名

診療科の特色・診療対象疾患

大学病院という性質上、当科は、肺癌などの悪性腫瘍、間質性肺炎をはじめとする難治性疾患、COPD および喘息のうち、市中病院でコントロール困難な例など、特に専門的診断・治療が必要な症例が主たる診療対象になっています。

1. 肺癌について

悪性腫瘍の罹患率は増加しており、なかでも日本人における癌の部位別では、肺癌が死亡率第一位になっており、さらに増加の一途をたどっています。

当科においては、肺癌の集学的治療を行っています。診断方法においても、従来の気管支鏡検査以外にも、局所麻酔下胸腔鏡検査や超音波気管支鏡による組織診断などの新規診断法も行っており、診断率の向上に寄与しています。治療に関しては、近年の分子標的治療薬の適応の可否に関しての癌細胞遺伝子解析なども検討し、また手術適応に関しては、同じ病棟である呼吸器外科との定期的な検討会を通して検討を行っています。さらに放射線治療科および IVR 科との協力のもと、放射線治療やラジオ波に関しても常に検討できる体制にあります。また、毎月複数回、院内において放射線科、呼吸器外科とともに検討を要する症例に関して検討を行っており、多方面からの視点で治療方針検討を行っております。

診断後は、基本的には告知を行い患者さんおよび家族との十分な相談のもと治療法の選択を行っています。また、生活の質（QOL）の向上のため、出来る限り外来での化学療法を行うことを推進しています。

2. 間質性肺炎について

間質性肺炎は一般的な肺炎とは異なり、抗菌薬などが効かず、副作用の強い薬剤を使用することがあり、その診断は重要です。当院では気管支肺胞洗浄や気管支鏡による肺生検、場合によっては外科的な胸腔鏡下肺生検なども行って診断し、個々の病態に合った治療法を検討いたします。

3. COPD について

近年広く認知されつつある COPD は慢性閉塞性肺疾患と呼ばれる病態です。日本で行われた研究では日本人のうち、500 万人以上が罹患しているとされています。以前は肺気腫と呼ばれていました（現在でも理解しやすいため、その名を使用することもあります）。日本人においては

喫煙がその原因のほとんどを占めるため、禁煙が第一であるのは当然ですが、最近非常に効果的な吸入剤も導入されており、今後は治療選択の幅も広がっていくと思われます。

4. 喘息について

安定期治療に関しては、吸入ステロイドを中心とした治療法が確立されてきています。また、大発作などの **near fatal** と呼ばれるような非常にシビアな状態に関して、集中治療部との連携のもと、人工呼吸器管理も含めた治療を行っています。

■ 診療体制

外来診療は新患は木曜日以外の月曜日～水曜日および金曜日、再診は月曜日～金曜日の毎日行っています（詳細は病院ホームページを参照ください）。また、内視鏡検査や胸腔鏡検査などを木曜日に行っております。他にも、気道過敏性検査・歩行試験など各種精密呼吸機能検査を火曜日に行っています。

入院診療に関しては主治医のほか担当医を配置し、それぞれの患者さんに対し治療法の検討を行います。さらに毎週定期的にグループ内で、すべての入院患者さんの検討を行い、科長回診を行っており、結果として複数回の検討(チェック)がそれぞれの患者さんに行われるという形の、呼吸器内科グループ全体で患者さんを診るというシステムになっています。

スタッフの専門医取得に関しては、日本呼吸器学会認定指導医、日本呼吸器内視鏡学会認定指導医、日本がん治療認定医機構暫定教育医、日本アレルギー学会認定指導医を擁しており、各種専門医教育施設に認定されており、専門医の教育が可能な専門施設です。また認定施設として、その認定更新も含めて全国レベルの医療の維持につとめています。

■ 治療実績

入院患者さんの内訳は、大学病院の性質上肺癌および胸膜腫瘍、縦隔腫瘍含め胸部悪性疾患が最も多く、次いで間質性肺炎、重症または難治性感染症、その他の難病、難治性の疾患が含まれます。

また、肺癌の化学療法は患者さんの生活の質（QOL）のためにも、できる限り通院による外来化学療法を行っています。

■ 臨床研究等の実績

大学医学部附属病院という性格上、治療技術の向上や新規治療法の開発をめざし、臨床以外にも日夜研究を行っています。基礎的な実験以外にも、患者さんの協力のもと行われている臨床研究もあります。医療の進歩のため、我々はがんばっていくつもりです。今後とも御協力お願いできれば幸いです。